で、河合政三郎、河合壽美次の両氏が寄進している。

狛犬

高麗犬とも書き、神社社殿の内部又は、境内に守護と装飾との意味を兼ねて置かれる一対の獣形像であり、木・石・金属・陶製と材質は様々で、寺院に置かれる事もある。

狛犬の原形は、オリエント・インドにおけるライオン像に起こり、中国、韓国を経て日本に渡来したものであり、初めは鎮子等として宮殿の調度の一つとして用いられたが、その後、朝鮮半島から来た異形の犬という意味で、「コマイヌ」といわれるようになった。また、鎮子から魔除けの意味合いが強くなり、神社や寺院にも用いられるようになった。

形状は、座ったもの、尻尾を上げたもの、玉を抱いているもの等様々であるが、一般には口を開けた阿形と、口を閉じた吽形の一対で置かれる。

阿吽の「阿」は、口を開いて発する声で、「吽」は口を閉じて発する声とされ、万物の根元を表し、対になる物を表す用語としても使用された。

当社の狛犬は、鶴崎神社本殿前と拝殿右側石段脇二ヶ所と拝殿左側石段脇と鹿島神社前の五対設置されている。

本殿前狛犬は最も古く、寛政五年（1793）九月に設置されたもので、砂岩系の石で造られており、座した姿である。

拝殿下右側石段脇上座の狛犬は、当社では最も新しく、昭和八年一月、原福藏作「倣国宝近江国大寶神社所蔵木彫高麗狗」と刻されており、現在の大寶神社（滋賀県栗東市綣）が所有している金箔が貼られた木製の狛犬（国宝・京都国立博物館所蔵）を模して製作され、木村淺五郎、木村竹太郎の両氏が奉納している。この狛犬も座した姿である。

拝殿下右側石段脇下座の狛犬は、明治二十八年五月に製作され、設置された。明治二十八年は拝殿を改築した年にあたる事から、明治の大改築は社殿を始め、工作物に至るまでの大規模工事だった事が窺える。この狛犬は尻尾を上げた姿である。

拝殿下左側石段脇の狛犬は、嘉永五年（1852）五月に製作され、設置された。この狛犬は尻尾を上げ玉を抱いた姿である。

鹿島神社前の狛犬は、大正十五年五月に宮崎の氏子により奉納、設置された。この狛犬は尻尾を上げた姿である。

本殿前の狛犬（寛政５年）

拝殿左側石段脇の狛犬（嘉永５年）

拝殿右側石段脇下座の狛犬（明治 28 年）

大寶神社の国宝を模した狛犬（昭和８年）

鳥居

神域の表示或いは、神社の門などとして建立し、神域を表示する場合も多いが、垣や塀の間に設けた門柱として出来たものが様式化されたものとされる。

鳥居の様式は、伊勢鳥居、山王鳥居、春日鳥居、八幡鳥居など様々な種類があるが、大別すると全て直線で造られた神明鳥居と、笠木が反った明神鳥居とに分けられる。材質は、木、石、銅などで造られるが、白木の木製が最も古い形である。

当社の鳥居は正面石段前と、東参道口と境内の金刀比羅神社参道の三ヶ所に設置されている。

表参道（正面石段前）の鳥居は石製の明神鳥居である。建立年代は不明であるが、建立当時に付けられていたと思われる「御嵜宮」と記された石製の社号額が鳥居から外され、保存されている事から、御崎宮から鶴崎神社に社名を変更した明治以前に建立されたと思われる。神輿の渡御を考慮し、貫までの高さを十分にとった規模の大きな鳥居である。現在の石製「鶴崎神社」社号額は、それまでの木製社号額が老朽化したため、平成八年に取り付けられた。

東参道口の鳥居も石製の明神鳥居である。寛延三年（1750）安原荘左ヱ門忠種の寄進により建立された。また、平成十三年七月、新たに石製の「鶴崎神社」社号額を取り付けた。

鹿島神社前の狛犬（大正 15 年）

表参道の鳥居

東参道口の鳥居（寛延３年）

金刀比羅神社参道の鳥居も石製の明神鳥居である。明治十五年五月に建立されており、鳥居の足に「信徒中」と刻されている。小規模ながら破損は無い。

金刀比羅神社参道の鳥居（明治 15 年）

玉垣・石段

玉垣は社殿及び神聖地を限るために四方に巡らした垣である。

一般には木、石などで造られ、その形状は様々である。古くは、垣は樹木をもって囲む柴垣であったとされ、次第に木製や石製になり、更に二重・三重に設けられて行った。

複数の垣になる場合は、内側を瑞垣、外側を玉垣・荒垣又は板垣という。

当社の玉垣は、三ヶ所で四組みに分けられて設置されており、一般の神社の様に四方に巡らされていない。これは、社殿が斜面に階段状に建設されているため、玉垣は前面のみの設置でその目的が果たされるためであろう。